

訳：富島沙織（JPYA・日本ポーランド青少年協会）

przełożyła Saori Tomishima (JPYA - Polsko-Japońskie Stowarzyszenie Młodzieży)

ゴルスナー

昔、昔あるところに、電話やテレビ、タブレットやパソコンがなかった時代、イナ川のほとりの村の穀物を保管する地下室にはゴルスナーと呼ばれる老いたねずみが住んでいました。市壁の門に住む中世から続くネズミの一家の出身でした。ゴルスナーは茶色の毛に覆われて、両方の鼻周りには太いほおひげがあり、ねずみならではのかっこいいしっぽがありました。彼はだいたい3歳の子どものぐらいの大きさと、大きなお腹を抱えていました。それは彼の熊手性の性格というよりかは、穀倉庫に保管されている穀物へいつでもありつけるからでした。大きなお腹の為に、ゴルスナーはたくさんのトラブルに見舞われました。お気に入りのオーバーオールをかじって穴を開けなくてはならず、穀倉庫の下の彼の穴場の入り口を広げなくてはなりませんでした。ゴルスナーは動物に対してとても友好的で、特に馬たちと仲良くしていました。しかし人間を恐れていました。よく、穀倉庫の周りを夜中に詮索していました。時には危険を顧みずその外まで出かけていました。ある時、イナ川の土手に座っていた時に、祖先のことを思い浮かべ、自分は最後の世代なのだと思いを馳せていました。朝の早い時間に、人間が来るとすぐに、自分の穴に戻るのです。彼は穏やかな生活を送り、何も望んでいませんでした。しかしある日、全てが変わりました。秋のある夜に、遠い地から着た若い男が穀倉庫で一晩を過ごしたのです。彼は壁にもたれかかり、寝るのに快適な姿勢を取り、そして眠りにつくのに、深い考えごとをしていました。その間、ゴルスナーは勇気をもって穴から出て、これからの何日か間にわたって穀物をむしゃむしゃ食べるため、いつものように穴に落とし、運ぶのに使っていた、金属バケツに新鮮な穀物を入れはじめました。彼は若い男がいることを予想していなかったもので、静かにしようと心掛けませんでした。その音に興味を持った若い男は、ゴルスナーにこっそりと近づきましたが、ズボンに大きな穴の空いた大きいねずみを見ると、恐怖のあまり叫び声をあげながら、穀倉庫から逃げ出しました。その若い男の泣き声で、村中の人々は起きてしまいました。彼は、自分に危害を与えようとしたおかしい生き物がいると人々に伝えました。最初は人々は信じませんでしたが、彼の怖がっている様子を見て、調査してみようということになりました。武装した人々は穀倉庫を探し始めました。村人は全ての角や壁のへこみや穴を覗きました。そして最後に、ゴルスナーの住処への入り口を発見したのです。彼らはずっと見ているネズミとは異なっていることを悟りました。村人はその危険な生き物を捕えて、その一帯から追放しようとしていました。何時間か後にはその生き物の穴を見つけ、徹底的に探索しました。村人はそこにあるほとんどの物がネズミというより人間が使っている物に見えて、ショックを受けました。村人が見つけたゴルスナーの所有物の中には、白い硬貨や教会のようなものが描かれた絵、市壁に使われる石がありました。村人はゴルスナーは悪魔ではないかと思い、困惑し、恐れを感じました。ゴルスナーの搜索を再開します。村人は怒りに満ち溢れ、殺意

を持っていました。彼らは恐ろしい生き物を探し、その道中にあるものを全て壊しました。その時、ゴルスナーは穀倉庫内のトンネルを抜け、イナ川に沿って逃げていました。できるかぎり速く走りました。たくさんの曲り道や僻地を走り抜け、時々木の陰で休むのに止まりました。彼はとても恐怖や悲しみ、心の痛ましさを感じていました。彼は何をすればいいか分かりませんでした。ゴルスナーは追跡者の村人が諦めたと思って、木の陰に座り、眠りにつきました。夢に彼の家族が出てきて、母親が全粒粉クッキーをやいて、父親が彼に話を聞かせてくれるのでした。突然、犬の吠える音と人間の怒鳴る声がゴルスナーを眠りから、引きずりだしました。ゴルスナーは見つかってしまったのです。追っては彼のすぐ後ろにいたのです。犬の歯が今にも自分のしっぽに届きそうに感じました。隠れる場所もなく、川に飛び込みました。オドラ川のほうに向かって泳ぎ、波に飲み込まれました。それ以来、ゴルスナーの消息は分かりません。今ではその生き物が生き残っているのかも分かりません。川に沈んでしまったという人もいれば、ゴレニユフの森の最も遠く、人里離れた場所の木の根っこに住むという人もいます。霧がかった朝にキノコを摘む人達は、距離を取って逃げ去るネズミの影を見る、という噂もあります。そしてあなたはどちらの結末が本当だと思いますか？